

上級日本語学習者の接続詞の習得に関する一考察
 —「仮定条件」を表す接続詞を中心に—
 A Study on Acquisition of Conjunctions by Advanced Japanese Learners

齊藤美穂, 神戸大学
 Miho Saito, Kobe University

1. はじめに

日本語教育現場においては、複文を構成する接続助詞の指導に比べて、接続詞の指導は十分に行われているとはいえない。倉持・鈴木（2007）によれば、接続詞は中級までの間に基本的なものが多く提出されているものの、独立した項目として扱っている箇所は非常に少ないという。特に論理的に構成することが期待されるレポートや論文を日本語で書く必要のある学習者にとっては、接続詞の適切な運用能力を身につけることが重要となる。これらの活動が期待される上級日本語学習者は、どの程度接続詞の運用能力を身につけているのだろうか。

2. 日本語学習者の接続詞使用に関する先行研究

日本語学習者の接続詞の使用に関する記述を確認しておくとして、倉持・鈴木（2007）は、中級日本語学習者8名（自然習得者・学校学習者両方を含む）を対象に接続詞テストと接続詞使用に関するアンケートを実施している。全9問で、想定されていた答えは番号順に、①したがって、②そして、③それで、④すると、⑤そして、⑥しかし、⑦じゃ、⑧だって、⑨それから、となっている。

テストの結果、正答率の平均は51.6%で、50%未満の問題が3つあったという。具体的には④すると（25.0%）、⑤そして（12.5%）、⑨それから（12.5%）である。（⑤と同じ「そして」でも②は正答率が50.0%に達していた。）この結果は、「そして」「それから」などの初級でも早い段階で導入される接続詞の正答率が低いことがうかがえるが、対象となった学習者の中には自然習得者も含まれているため、教室学習で学んできた者との間に差があるのではと考えられる。

田代（2007）は、国立国語研究所作成のデータベースを利用し、中級日本語学習者と（中国語母語話者）日本語母語話者の意見文を比較して、学習者の文章の特徴を量的に分析している。その結果、1作文の長さ、1文の長さ（文節数）、1文中の節数のいずれも、有意に母語話者のほうが多かったが、論理関係を表す副詞節の1作文当たりの平均使用数を比較した結果、原因・理由節については両者に有意差がなかったという。（ただし文末表現によるものを含めると、母語話者のほうが多い）。条件節については、有意差はないものの母語話者のほうが使用が多く、条件節の各用法の比率に有意差があったという。具体的には母語話者は約47%が仮定条件を使用したのに対し、学習者は約28%であった。また母語話者に見られる反事実的条件を用いて反駁を展開するような使用は学習者には見られず、学習者は恒常的条件の比率が46%を占めるといった違いである。主な分析対象は従属節だが、論理関係を表すものが網羅的に扱われている点や、母語話者との比較により学習者の特徴がより明確になる点で参考になる。

浅井（2003）も母語話者と学習者の接続詞の使用を比較している。日本語母語話者（文系大学院生）と上級日本学習者（N1取得の中国語母語話者）に同じテーマで800字程度の作文を書かせ、両者における接続詞の使用を比較し、学習者のほうが接続詞の使用が多い、使用頻度の高い接続詞が母語話者と異なる、学習者は話し言葉的な接続詞の使用が見られるといった特徴があることを述べている。大変興味深い結果ではあるが、論理構成が異なれば当然使用する接続詞も異なるため、接続詞の習得状況を知るために母語話者の結果と比較できるようなデータではない。

3. 本研究の目的と方法

3.1 本研究の目的と方法

本研究では、上級レベルの日本語学習者の接続詞の習得状況を明らかにすることを目的とする。また、その習得の妨げとなっている要因を分析することを試みる。そのため、上級学習者を対象に接続詞の穴埋めテストを実施し、同じテストに対する日本語母語話者の解答と比較する。ただし本稿では、紙幅の都合上、論理的な関係を表す接続詞のうち、「仮定条件」を表すものに絞って分析を行う。

3.2 調査対象とするデータ

使用する主たるデータは、神戸大学において2017年度後期に開講された学部留学生対象第二外国語科目「日本語VI（文法）」（上級学習者対象）の受講生21名に対して行った、接続詞穴埋めテストの解答である。また、母語話者との比較を行うため、関西の私立大学で2014年度後期に開講された、日本語学（文法論）の授業を受講していた日本人学部生37名（2年生33名、3年生4名）による、同じ接続詞穴埋めテストの解答を用いる。

3.3 調査項目

日本語記述文法研究会編（2009）は接続表現を次の表1のように分類している。

表1 接続表現の一覧（日本語記述文法研究会編2009：p.58の表を一部編集）

論理的展開を表示する接続表現	確定条件	だから／それで／そのため／したがって／ゆえに／よって／そこで
	仮定条件	それなら／なら／それでは／では／そうしたら／すると／そうすると／とすると／とすると／してみると／そうなると／こうなると／となると
	否定条件	さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと／さもないと
	理由	なぜなら（ば）／なぜかという／どうしてかという／というのは／というのも／だって
	逆接	しかし／けれど／でも／ところが／それが／それなのに／そのわりに／そのくせ／と（は）いっても／とはいえず／そうはいっても
加算的關係を表示する接続表現	添加	そして／それで／それと／あと
	累加	それに／そのうえ（に）／おまけに／そればかりか／ひいては／しかも／それも

	換言	すなわち／つまり／いいかえると／いわば／いってみれば
	例示	実際／事実／たとえば
	卓立	特に／とりわけ／なかでも
	代替	代わりに／その代わり（に）／いな／そうではなく（て）／そうじゃなくて／というより（も）／というか／むしろ
対等な関係を表示する接続表現	並列的提示	および／ならびに／かつ／なおかつ
	選択的提示	または／ないし（は）／もしくは／あるいは／それとも
話題の展開を表示する接続表現	転換	ところで／さて／それにしても／話は飛ぶけど／話は変わるけど／それはそうと／それより
	列挙	第 1 に／第 2 に／1 つめに／2 つめに／まず／はじめに／最初に／つぎに／つづいて／ついで／それから／また／さらに／ほかに／最後に
	対比	それに対して／反対に／半面／逆に／一方（で）／他方（で）
	まとめ	このように／以上（のように）／要するに／こうして／結局／このようにして
	補足	ただし／ただ／もともと／ちなみに／なお
	無視	いずれにしても／どっちみち／どっちにしても／何にしても／何はともあれ／とにかく

接続詞テストでは、「論理的展開」を中心とした 14 の調査文を用意したが、このうち「仮定条件」を表す接続詞が答えとして想定される問題は問題番号 2～5 の 4 つである。これらの 4 つの調査文と、具体的に想定していた接続詞を表 2 に示す。調査項目となる接続詞を入れるべき箇所は、「【 】」で示している（実際の調査では、十分な長さのスペースを空けて下線を施して示した）。なお、問題番号 2 については「仮定」「逆接」の双方が使用可能なため、併記している。

表 2 調査項目の接続表現としてのタイプと想定される接続詞

問題番号	接続表現の下位タイプ	調査文	接続詞の例
2	仮定／逆接	日本では、20 歳以下の青少年を対象に飲酒を禁止する法律がある。【 】、誰でも買える自動販売機での酒類の販売を認めているのは、なぜだろうか。	では／にもかかわらず
3	仮定	溶液 A を加熱した。【 】、75 度で沸騰し始めた。	すると
4	仮定	これは溶液 A に加えた物質 B との化学反応による影響ではないか。【 】、この化学反応を利用して、効率的に湯を沸かす装置を作ることができるのではないか。	それならば
5	仮定	企業は今まで以上に積極的に女性の雇用を進めるべきである。【 】、労働力不足が解消できるばかりでなく、世帯当たりの所得が増え、消費を促進し、結果として税収が増えることも期待できる。	そうすれば

なお、調査文の語彙には、学習者にとって必ずしもなじみのない語彙が含まれていたため、実施の際は筆者で口頭で読み上げながら、学習者にとって理解の難しい語彙について説明を加えるようにした。

4. 結果

本節では、問題番号 2~5 の結果を順に見ていく。まず当該の調査文を再度示し、留学生の解答と、日本人学生の結果をそれぞれ表に提示する。

4.1 問題番号 2

2) 日本では、20 歳以下の青少年を対象に飲酒を禁止する法律がある。【 】、誰でも買える自動販売機での酒類の販売を認めているのは、なぜだろうか。

この調査文は、「逆接」の接続詞を想定して設けた調査文 1「日本では、20 歳以下の青少年を対象に飲酒を禁止する法律がある。【 】、誰でも買える自動販売機での酒類の販売を認めている。」と、後文のタイプを変更した（ここでは当該箇所の下線を施して示している）。前の文との関係を、2) で付加された波線部分まで含めるか否かで、「では」のような仮定条件を表す接続詞を選ぶべきか、調査文 1 と同様に逆接を用いるかが変わる。留学生の結果を表 3a、日本人学生の結果を表 3b に示す。

表 3a 問題 2 への留学生の解答

論理的展開	逆接（しかし 4, が 1, けれども 1, ところが 1）	7	32%
	逆接<口語>（なのに 4, そうなのに 1※誤形式）	5	23%
	仮定（では 5）	5	23%
話題の展開	対比（それに対し 1, 反して 1※誤形式）	2	9%
	転換（そういえば 1）	1	5%
加算的關係	例示（実際に 1）	1	5%
その他	「とっせ」※「どうせ」（副詞）の誤りか	1	5%
合計（複数回答を含む）		22	100%

表 3b 問題 2 への日本人学生の解答

論理的展開	逆接（しかし 9, だが 4, にもかかわらず 4）	17	45%
	逆接<口語>（なのに 7, それなのに 4, でも 1）	12	32%
	仮定（では 4）	4	11%
話題の展開	対比（その一方で 3, 一方で 2）	5	13%
合計（複数回答を含む）		38	100%

留学生の解答では、逆接（口語的なものを含む）の占める割合が調査文 1 に比べて約 21%減少し、約 55%となった。代わりに想定していたもう一方の、仮定条件を表す「では」の使用が 23%見られた。日本人学生の解答でも、調査文 1

で95%を占めた逆接タイプが約77%に減少したものの、留学生よりも逆接に偏る傾向が見られた。1では見られなかった仮定条件の「では」が現れたものの、その比率は11%にとどまった。なお、口語的な接続詞の使用は留学生だけでなく日本人学生にも少なからず見られた。

4.2 問題番号3

3) 溶液Aを加熱した。【 】, 75度で沸騰し始めた。

この問題では、前文が話し手の意志的な行為であるのに対し、後文はそうではない。これはいわゆる「発見」を表すもので、厳密には「仮定条件」というべきではないが（石黒 2008 参照）、このタイプとされる「すると」が用いられる典型的な文脈の一つである。なお、この「すると」と類似の用法を持つ「その結果」を本発表では同じタイプとしたが、これには異論もありうる（「確定」タイプに分類可）。留学生の結果を表4a、日本人学生の結果を表4bに示す。

表4a 問題3への留学生の解答

論理的展開	仮定（すると4, その結果2）	4	29%
	仮定<口語>（そうしたら3, そしたら1）	4	19%
加算的關係	添加（そして7）	7	33%
その他	「しばらくすると」※「すると」に準じる？	1	5%
無回答		3	14%
合計		21	100%

表4b 問題3への日本人学生の解答

論理的展開	仮定（すると29, その結果2, 結果1※）	32	86%
加算的關係	添加（そして4）	4	11%
その他	「しばらくして」※「仮定」に準ずる？	1	3%
合計		37	100%

留学生の解答は、口語的なものも含めれば48%がこの「すると」ないし他の仮定条件を表すものだが、単独の接続詞で見れば添加の「そして」が33%で最も多くの割合を占めている。これは上述の前文と後文の関係を考えれば、不適切なものである。学習者は、継起的な関係ととらえてこれを使用したと考えられる。この問題では無回答も3名（14%）見られた。一方、日本人学生の解答は「すると」が単独で29例（78%）を占めており、調査文3が「すると」の用いられる典型的な文脈であることが示唆される。ただし、添加の「そして」を回答した者も11%いた。

4.3 問題番号 4

4) これは溶液Aに加えた物質Bとの化学反応による影響ではないか。【 】
この化学反応を利用して、効率的に湯を沸かす装置を作ることができるのではないか。

調査文4の前文は「仮説」即ち不確かな内容である。これをもとに仮定的な考えを述べる場合には、仮定条件を表す接続詞、特にソ系の指示語や断定の助動詞と「する」「なる」を組み合わせた複合接続詞（馬場 2006）の使用が想定される。留学生の結果を表 5a、日本人学生の結果を表 5b に示す。

表 5a 問題 4 への留学生の解答

論理的展開	仮定（では3, ならば1, そうであるなら1）	5	24%
	確定（したがって2, それで1）	3	14%
加算的關係	添加（そして1）	1	5%
	換言（すなわち1）	1	5%
対等な關係	選択的提示（それとも1）	1	5%
話題の展開	列挙（また1）	1	5%
その他	「もしかしたら」（副詞）	1	5%
無回答		8	38%
合計		21	100%

表 5b 問題 4 への日本人学生の解答

論理的展開	仮定（ならば6, そうすると3, それならば3, だとすると3, そうならば2, ということは・だとすれば・そうだとすれば・そうであるとしたら・とすると・であるならば・そうであるならば・では各1）	25	66%
	確定（そこで2, 従って1）	3	8%
	確定<口語>（だから1）	1	3%
加算的關係	添加（そして4）	4	11%
	換言（つまり3）	3	8%
話題の展開	列挙（また2）	2	5%
合計（複数回答を含む）		38	100%

この調査文に対する留学生の解答では、無回答が38%（8名）を占め、最も多かった。次いで仮定条件を表すもの（24%）、確定条件を表すもの（14%）であったが、他は1例ずつで接続詞のタイプに一貫性はなかった。無回答の多さから考えても、この種の文の間を關係を表す接続詞の習得はあまり進んでいないと考えられる。日本人学生の場合、非常に多様な形式が見られた。しかし、タイプとしては多くが一致しており、仮定条件が66%を占めた。次に確定条件（口語含

む)、添加の「そして」が11%ずつであった。添加が用いられたのは推量の文の連続に着目したためと考えられる。

4.4 問題番号5

5) 企業は今まで以上に積極的に女性の雇用を進めるべきである。【 】、労働力不足が解消できるばかりでなく、世帯当たりの所得が増え、消費を促進し、結果として税収が増えることも期待できる。

調査文5では、前文で主張する内容を実現した場合に生じうる結果が後文に述べられている。「そうすれば」のようなソ系指示語と「する」から成る仮定条件を表す接続詞の使用が想定される。

表 6a 問題5への留学生の解答

論理的展開	仮定 (そうすると3, すると2, そうすれば1)	6	27%
	仮定<口語> (そうしたら4)	4	18%
	理由 (なぜなら4)	4	18%
	確定 (それで1)	1	5%
話題の展開	転換 (それより1) ※「それにより」の誤りか?	1	5%
その他	「こうしたら」1, 「これで」1	2	9%
無回答		4	18%
合計 (複数回答を含む)		22	100%

表 6b 問題5への日本人学生の解答

論理的展開	仮定 (そうすれば12, そうすると6, その結果※2, すると1, そうなれば1)	22	59%
	理由 (なぜなら6)	6	16%
話題の展開	補足 (ただ1)	1	3%
その他	「それは」2, 「そうすることで」2, 「それによって」1, 「これにより」1, 「これによって」1	7	19%
無回答		1	3%
合計		37	100%

留学生の解答では、仮定条件 (口語を含む) を表すものが45%と最多であったが、理由の「なぜなら」と無回答がそれぞれ18% (4名) 見られた。後文は前文の主張の根拠とも考えられるが、その述語形式 (無標) から、理由を表す「なぜなら」は不適切となる。これを答えた学習者は、このような文末表現との義務的な共起関係の知識もまだ十分に持っていないことが考えられる。日本人学生の場合、仮定条件を表すものが59%を占めるが、理由の「なぜなら」を選択する者も16% (6名) いた。なお、19%を占める「その他」には、主にソ系、コ系の

指示詞を含む句で、必ずしも間違いとは言えないが、接続詞とは認めにくいものをまとめた。

5. まとめと考察

5.1 調査結果のまとめ：仮定条件を表す接続詞の習得傾向

同じ「仮定条件」タイプに分類される接続詞でも、習得状況に差がある。それぞれの調査文に対する留学生の解答から結果をまとめると、以下のようになる。

- ・問題2（想定解答例：「では」／「しかし」）：
後文のどこまでを接続詞のスコープ（関係づけられる範囲）ととらえるかで、逆接か仮定条件「では」かが分かれる。逆接が最も多かったが、逆接のみが適切となる調査文1では現れなかった「では」が23%（5名）見られる点から、上記のスコープによる差異を身につけている学習者もいることがうかがえる。
- ・問題3（想定解答例：「すると」）：
「発見」を表すと言われる「すると」については、日本人学生の約8割がこれを選択するのに対し、留学生は半分程度にとどまった。添加の「そして」を選ぶ者が3割程度おり、文のタイプに関係なく、継起的な関係であればこれが使えると考えている可能性がある。
- ・問題4（想定解答例：「それならば」）：
無回答が最も多く（8名：38%）、前文の仮説が真であった場合に導かれる結果を述べる「それならば」「（そう）だとすれば」のような節続詞を使用した学生は、4分の1程度にとどまった。これは、日本人学生が多様な形式を用いながらも、66%がこのタイプを回答したのとは対照的である。
- ・調査文5（想定解答例：「そうすれば」）：
これも前文は仮定的な事態だが、前文は筆者が考える今後の行動方針に関する主張であり、その実行により導かれる事態を表す、「そうすれば」のような接続詞が期待される。無回答は問題4の半分に留まったが、後文の述語形式から不適切となる「なぜなら」を用いた留学生が18%（4名）いた。（ただしこれは日本人学生もほぼ同様であった。）

これらの結果から、前文と後文が同一主語の意志的行為かどうかといった、接続詞の使用に関わる文タイプの制約や、前文を事実として仮定したことを述べる際に用いられる「複合接続詞」などの習得は、まだ進んでいないと言える。その要因としてはやはり指導の不足が大きいと考えられる。次節ではこの点について考察するため、日本語教材における、仮定条件を表す接続詞の扱いを確認する。

5.2 日本語教材における仮定条件を表す接続詞の扱い

日本語教材における仮定条件を表す接続詞の扱いを確認するため、スリーエーネットワークより刊行されている、『みんなの日本語 初級Ⅰ／初級Ⅱ／中級Ⅰ／中級Ⅱ』の本冊及び翻訳・文法解説書における文法項目としての扱い、語彙索引や新出語彙リストへの掲載状況を確認した。その結果を概括すると表7のようになる。「説明のある箇所」に記した「語彙リスト」は、翻訳・文法解説書の各課の冒頭にある、新出語彙一覧である。『初級Ⅰ／Ⅱ』ではまず「文型」・「例

文」及び「練習」部分に現れる語彙、次に「会話」で導入されるもの、最後に各課の最後の「課末問題」中の「読み物」で導入されるものが提示される。表7では、学習の際に主となる「文型」「例文」「練習」に提示されるものは「語彙リスト」とのみ示し、他の2か所についてはそれぞれ<>内にその情報を付与する。

表7 『みんなの日本語』シリーズにおける仮定条件を表す接続詞の扱い

仮定条件を表す接続詞	教科書レベル	課数	索引記載	説明のある箇所	文法解説書での説明
じゃ	初級Ⅰ	3	○	語彙リスト<会話>	well, then, in that case
では	初級Ⅰ	22	○	語彙リスト<会話>	Well then,
すると	初級Ⅱ	30	×	語彙リスト<読み物>	and, then
それなら	初級Ⅱ	35	○	語彙リスト<会話>	in that case
そうすれば	中級Ⅰ	6	○	語彙リスト	if you do so, then, if so
すると	中級Ⅰ	7	○	語彙リスト	thereupon
それでしたら、 ～(の)がよろ しいんじゃない でしょうか	中級Ⅰ	9	○	語彙リスト<会話表現>	In that case, wouldn't ~ be best?
だとすると/だ とすれば/だと したら	中級Ⅱ	-	×	巻末： 文法プラスアルファ	だとすると/だとすれ ば/だとしたら are used for stating that if a postulate P is true, the conclusion will be Q.

結果として、文法項目（新規学習項目）として扱われているものはなく、『中級Ⅱ』以外では語彙リストのみ、『中級Ⅱ』では、主たる課での学習項目ではなく、巻末に補いとして文法項目を列挙した「文法プラスアルファ」で意味の説明が付されていただけであった。これらの接続詞は、複文の従属節起源と考えられるが、複文の従属節を構成する条件形式（接続助詞）が文法項目として扱われているのと比べると、その扱いに大きな差があることは否めない。また、元となる条件形式と、これらの接続詞を関連づけて捉える意識が学習者にあるかも疑問であり、本調査の結果からも、条件形式を習った際に学んだ（はずの）知識が、派生した接続詞の運用に自動的に適用されるとも考えにくい。以上はあくまで『みんなの日本語』シリーズの結果だが、初級～中級にかけての総合的な教科書では概ね似たような状況であると予想される。

一方、数少ない上級用の文法学習教科書で、接続詞を扱っているものとして、庵功雄・三枝令子（2013）『日本語文法演習 まとまりを作る表現—指示詞・接続詞・のだ、わけだ、からだ—』（スリーエーネットワーク）を確認したところ、「Ⅱ. 接続詞」内で、用法の類似性（話題の転換ないし導入）から、「（それ）では」と「ところで」、形式的な類似性から「それで」と「それでは」の比較があった。しかし、いずれも意味的な説明だけで、前文と後文のタイプなど、文法的制約への明確な言及はなかった。

6. おわりに

問題3の結果で述べたように、仮定条件の「すると」を使うべきところで添加の「そして」を使う学習者がいることを考えれば、接続詞の運用に関わる文法的な制約を改めて確認する必要があると思われる。仮定条件を表すものの多くは接続助詞由来であるが、接続助詞が日本語教材で文法項目として積極的に取り上げられ、主節の文タイプの違いなどにも言及がされているのに対し、「すると」「そうすれば」などの接続詞は、会話や読解の中でさりげなく導入され、見た目が類似した形式間の区別がつかないような、おおまかな訳しか示されていない。

俵山(2017)の示すレベル別の接続詞シラバスでは、上級でもこれらは取り上げられていないが、アカデミックライティング能力の向上には、学習が不可欠だと思われる(倉持・鈴木2007の結果からも、自然に習得されるとは必ずしも期待できない)。比較的指導がなされている接続助詞の運用にも不足の見られる学習者には、その復習も兼ねて、接続詞の指導をすることが望まれる。この運用能力の習得は読解能力にも影響すると考えられる。その意味では、今回扱えていない、論理的展開を表す「否定」タイプの接続詞も併せて、文法的な制約を改めて整理し、適切な接続詞の指導法を検討したい。

参考文献

- 浅井美恵子(2003)「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4,名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻,87-97
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社
- 倉持益子・鈴木秀明(2007)「日本語学習者における接続詞の習得」『神田外語大学紀要』19,211-234
- 田代ひとみ(2007)「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14,131-144
- 俵山雄二(2017)「第8章 流れがスムーズになる接続詞の使い方」山内博之(監修)・石黒圭(編)『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版
- 日本語記述文法学会(編)(2009)『現代日本語文法7 第12部 談話 第13部 待遇表現』くろしお出版
- 馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現—指示・接続・反復』おうふう
<日本語教材>
- 庵功雄・三枝令子(2013)『日本語文法演習 まとまりを作る表現—指示詞・接続詞・のだ、わけだ、からだ—』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク(編)『みんなの日本語』シリーズ 初級Ⅰ～中級Ⅱ: 本冊及び文法解説ノート ※以下、レベル別に刊行年のみを示す)
- ・初級Ⅰ 第2版(2012)
 - ・初級Ⅱ 第2版(2013)
 - ・中級Ⅰ(2008)
 - ・中級Ⅱ(2012)